伝承

大人の蛇方衆（じゃかたしゅう）（担ぎ手）は約20人。それぞれ仕事を抱えていて忙しく、1日の疲れもあるはずです。それにもかかわらず週3回行われている練習には、毎回ほぼ全員が参加し、自分たちの練習の傍ら子どもの指導に当たっています。

魅力を伝える

郷土芸能を守り伝えていくためには、まずは実際にかかわっている人がその郷土芸能について知り、好きにならないとなかなか続くものではありません。

同保存会には、御厨蛇踊りがいつ、どのようにしてできたのか明確に記した資料などはなく、あいまいな部分がありました。そこで平成9年ごろ、当時役員をしていた川本尚登（なおと）さんが同保存会からの依頼を受け、聞き取り調査をしたり、資料を集めたりしてその歴史をまとめました。

御厨蛇踊りについて知っていくうちに蛇踊りに魅了されたという川本さんは、「蛇踊りでは、1人が玉を持ち、10人が蛇を担ぎます。囃子も含め、みんなの息がぴったりと合ったときは鳥肌が立つほど感動します。そこが蛇踊り自体の魅力であり、辞められない理由でしょうね」と話します。

この数年、蛇踊りに参加する人が増えている理由の一つは、蛇踊りにかかわっている人が心から蛇踊りを楽しみ、愛している姿が見えるからこそ。その魅力を伝えることで、御厨蛇踊りは着実にそしてしっかりと地域に浸透しています。

楽しみながら受け継いでいきたい

総指揮
川本 尚登さん
（御厨・駅通、43）

御厨蛇踊りについて詳しく調べるようになってからその魅力に引き込まれました。また、多くの人の努力で発展し受け継がれてきたのだと分かり、真剣にしないといけないと思いました。御厨の蛇踊りが一番いいと誇りを持って取り組んでいます。

周囲の環境もいいし、仲間もいい。練習を楽しみに集まる今の雰囲気を守りつつ、郷土芸能を受け継いでいきたいです。それがもっと地域に浸透していけばいいですね。

うまく楽器を鳴らせたときが一番うれしい

囃子
巖 莉緒（りお）さん
（御厨・駅通、10）

面白そうだったから自分から入ろうと思い、小学1年生のころから参加しています。

練習はきついときもあるけれど友だちと一緒にできるし、色々な楽器を演奏できるので楽しいです。うまく楽器を鳴らせたときが一番うれしいので、もっと上手になれるように頑張って、本番では悔いのないようにしたいです。

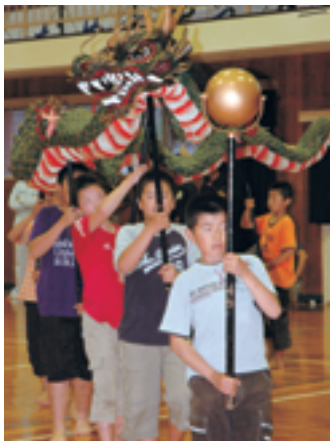
これからも御厨蛇踊りがずっと続いてほしいです。

守り伝える

体育館では、大人たちが子どものそばにつき、一つ一つの動きにアドバイスをしたり、音の出し方やタイミングを教えたりしています。その指導は、体が覚えるまで何回も何回も繰り返されます。

同保存会のメンバーは、「自分たちは地域の郷土芸能を守り受け継いでいかなければいけないという使命感を持ち、その活動をしていることに誇りを持っています。だからこそ「御厨蛇踊りが一番だ」という思いで取り組んでいるんですよ」と話していました。

「大人の蛇方衆はかっこいい。自分たちもそうなりたいという憧れを持っています。自分たちも続けていかなければいけないと思います」と話すのは、小学1年生から毎年参加しているという男子中学生。その信念と誇りは子どもたちにもしっかり受け継がれていました。



郷土芸能にかかわっていることを誇りに思います

囃子（写真右から）
林 帆津季（ほづき）さん
（御厨・雇進、14）
福田 奈菜（なな）さん
（御厨・雇進、13）
田中 悠（はるか）さん
（御厨・駅通、13）

楽しそうだったので、小学校3、4年生のころから始めました。蛇踊りはとても楽しいです。

今、自分たちが郷土芸能「御厨蛇踊り」にかかわっていることを誇りに思っています。だから毎年参加しているし、最後まで一生懸命頑張りたいです。